

# 田中萬年著 「職業訓練原理」



ポリテクカレッジ千葉  
(千葉職業能力開発短期大学校)

山見 豊

### 職業能力開発関係者必携の書である

「職業訓練とは何か」という問いかけは、関係者ならだれしも抱く疑問であろうと思っており、私自身ずっと抱き続けてきた。何故、この疑問を持つかと言うと、あまりにも変化が激しいことである。これこそだと自分で理解したつもりでも、職業訓練の内容としての技術・技能の変化はもちろんのこと、職業訓練の枠組みとしても法律も、政策の中心も度々変わる。社会的ニーズの変化に対応してというべきなのか。この中で、私は職業訓練とは何かと問われたとき、わが国では、職業能力開発促進法に規定された教育訓練が職業訓練ですよと答えてきた。しかしながら、外国ではどうですかと問われれば、答えに窮し、そもそも成立させている理念は、哲学はと聞かれれば、佐々木輝男先生の「生・労・学」の三位一体保障を思い出しながらもまたまた答えに窮してしまう。これら諸々の疑問に正面から答えてくれる待望の書が本書である。

本書を手にしたとき、私は、これは便利だとまず思った。それは、職業訓練はと問われたとき、制度はあそこの資料を見れば、また歴史については、考え方は、国際的な条約はと断片的に記憶している資料のありかをいつも探していたからである。

本書は、巻末に述べてあるとおり、「職業訓練の意義」について体系的にまとめている。

第2章で「職業訓練」の用語について。第3章で制度、第4章、第5章で職業訓練の成立と歴史について、第8章で目的、第9章で世界の職業訓練、ILO、ユネスコの規定についても触れてある。

本書の序論は、「教育」と“Education”に関する誤解と幻想である。浅学の私には少し読みづらく難解にも思える。しかしながら、著者が力を入れている様が窺える。教育は、Educationの訳だと思いきや大きく違うらしい。寺子屋では、職業に関する指導も行われていたが、近代的学校制度が成立し、整備される明治8年末、文部省の業務が教育であることを布達したことから大きな誤解がはじまるなど、教育、学問、文学の語源に戻っての論述がある。かくして、「職業訓練は教育ではない」という誤解と偏見が生まれ、“Education”にはある職業に関する能力の開発の概念が日本語の「教育」から欠落した。筆者は、「教育」への幻想からの解脱を唱えているもので、本書に触れご理解いただくことを願う。

さて、何はともあれ、職業訓練に携わる者、少なくともそれを職とする者は、プロとして職業訓練に対し強力な確信を持つべきであろう。

本書の題目「職業訓練原理」とは、はじめにの中で、「職業訓練の存在意義を明確にするために、職業訓練のアイデンティティー（独自性・主体性）の確立に寄与する論である」と定義されている。本書は職業能力関係者必携の書である。